

令和元年度 日本大学スポーツ科学部 学部研究費 研究実績報告書

所属：スポーツ科学部 競技スポーツ学科
 資格：教授
 氏名：森丘 保典

研究課題名	競技スポーツのコーチング実践における効果的な量的・質的情報（データ）の収集・分析および活用方法に関する研究
研究目的及び研究概要	<p>昨今の小・中・高校期（以下、ジュニア期）のスポーツ環境においては、国内外の競技会の高度化・低年齢化やタレント発掘事業の実施などによって、指導者や保護者の指導や管理がますます過熱し、早期専門化やトレーニング負荷の増大などによる子ども達への身体的および精神的な負担の増大が懸念されている。また、ジュニア期における競技スポーツの早期専門化や全国規模の大会開催などの是非については、依然として二元論的な議論に留まっており、具体的な方策が示されているとは言い難い。</p> <p>そこで本研究では、国内一流競技者の競技パフォーマンスの変遷について量的研究法を用いて明らかにするとともに、彼らの育成・強化プロセスについて質的研究法を用いて把握することにより、ジュニア競技者に対する望ましいトレーニングやコーチングのあり方や育成・強化システムのあり方について、総合的に検討するためのエビデンスを提示することを目的とする。</p> <p>①各種競技会において映像情報を中心とするパフォーマンス分析を行い、量的・客観的情報（データ）を収集・分析する。 ②競技者のスポーツ歴（競技ヒストリー）について、半構造化面接法などを用いたインタビュー調査を行い、質的・主観的情報（データ）を収集・分析する</p>
研究実績の概要	<p>①各種競技会におけるパフォーマンス分析については、日本トップレベルの選手のレースパターン分析を行い、その傾向を明らかにするとともに、選手やコーチにデータをフィードバックすることによって、トレーニングやコーチング実践に活かすことができた。</p> <p>②競技者のスポーツ歴（競技ヒストリー）については、日本および世界一流競技者におけるジュニア期からシニア期かけての競技パフォーマンスの変遷や、若年期のアスリート育成に関する国内外の動向について検討し、中長期的な視点での競技者育成の重要性および育成指針に基づいた具体的な施策の展開などについて公表することができた。</p> <p>今後は、インタビュー調査などを実施しながら、育成・強化システム（モデル）構築に向けた情報を収集・分析することが課題となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文①：柴山一仁、貴嶋孝太、森丘保典、櫻井健一「一流 110 mハードル走選手のレースパターンと 競技パフォーマンスの関係：レース局面に基づく検討」、体育学研究、査読有、64巻2号、2019年12月、475～485ページ。 ・著書①（共著）：森丘保典「グッドコーチになるためのココロエ（第3章第1項スポーツトレーニングの基本的な考え方）」培風館、2019年7月、82～92ページ。 ・著書②（共著）：森丘保典「競技者育成プログラム（第1章第1節、競技者育成指針の基本的な考え方）」、公益財団法人日本陸上競技連盟、2019年11月、10～15ページ。 ・著書③（共著）：森丘保典「陸上競技のコーチング学（全体の編集、第3章のとりまとめ及び第1節の執筆）」、大修館書店、2020年2月、44～48ページ。 ・学会発表①（基調講演）：森丘保典「ポスト2020 Tokyoにおけるスポーツ科学」大阪体育学会第58回大会、2020年3月（誌上開催）、大阪市立大学。 ・学会発表②（特別講演）：森丘保典「未来のアスリートを育成するために必要なこと」第173回日本体力医学会関東地方大会、2020年3月（誌上開催）、日本大学。 ・報告書①：柴山一仁、杉本和那美、貴嶋孝太、森丘保典「世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析—男子ハードル種目における予選から決勝にかけての記録の変化に着目して—」日本陸上競技連盟・陸上競技研究紀要、2020年3月。 ・報告書②：杉本和那美、柴山一仁、貴嶋孝太、森丘保典「世界選手権ドーハ大会における競技パフォーマンス分析—女子ハードル種目における予選から決勝にかけての記録の変化に着目して—」日本陸上競技連盟・陸上競技研究紀要、2020年3月。